

「オネエ所長の調査ファイル」 # 29

山崎浩治

1

「サオリ、結婚の予定はないの？ あたし、フォーマルなドレス着て、夜会巻きのエレガントな髪で安室ちゃんの『CAN YOU CELEBRATE?』歌いたいわ！」

「なんか友人代表みたいなこと言ってるけど、あたしの結婚式でおっさんのポジションは、花嫁の父、だからな」

「花嫁の父よりお嫁さんになりた〜い。愛妻弁当作って、海苔でLOVEって書きたいの。アロマオイルで全身マッサージやったら、かわいいお嫁さんになれるかな」

「になれるか！ ならせてたまるか！」

「それじゃ、あたしが死んだら死に装束は純白のウエディングドレスにして。忘れないようにエンディングノートに書いとかなきゃ」

「金沢プライベート・リサーチ」のオネエ所長、市山とツンデレ調査員の沙織が山間部の集落を歩いている。この日の市山はチビTシャツとサブリーナパンツ、足元はフラットシューズで、「勝手にしやがれ」のジーン・セバークを参考にした女装らしい。

今回の依頼人は大手企業の東京本社に勤める会社員・健一(51歳)である。石川県内の過疎集落で暮らす母親・政子(75歳)を東京に呼び寄せたいが、故郷を離れたくないと言って一歩も引かない。

「その真意を調べてほしい」という依頼だった。農業を営む政子の夫は5年前、東京の病院で死去している。政子はしばらく都内にある健一の分譲マンションで暮らしていたが、「東京の水は合わない。うちに帰る」と帰郷し、以来、一人暮らしを続けていた。閑散とした集落の道を歩きながら、沙織がため息をついて言った。

「徒歩圏内にスーパーはなし。週1回の病院通いは1日がかりの大仕事よ。依頼人が母親を東京に呼び寄せたくなる気持ち、分かるわね」

健一は高校卒業後、東京の大学に進学し、卒業後はそのまま都内で就職。数年後に社内恋愛の妻と結婚した。2人の子どもが小さいころは一年に数回里帰りしていたが、最近は多忙を理由にほとんど実家に帰っていない。県外に嫁いだ妹の寧々(49歳)も一年に一度、顔を出すのがせいぜいという。

「母親が田舎を離れたくない理由なんて直接聞けばいいのに。親子なんだから」

不満そうに言った沙織に、市山が答えた。

「親子って長く離れて暮らすと、他人行儀になってしまうのよ。依頼人の母親に会って本心を聞きましょう」

2

「介護が必要になったら地元の老人ホームに入る。子どもたちに迷惑をかけたくない。それがお母様の気持ち。親心ね」

数日後、市山が電話で健一に調査結果を報告している。

「何が親心ですか。病気で倒れて入院された方がよほど迷惑なんですよ。こっちは東京にいて、女房も仕事を持っている。週末のたびに看病しに帰れないんですよ！ マンションで一緒に住むのが窮屈だと言うなら、うちの近所の高齢者マンションを借りてもいいって言ってるんですけどね」

電話の向こうでまくし立てる健一に、市山が言った。

「お父様が倒れた時、東京の病院に転院したそうね」

「高齢のおふくろには看病できませんから」

「そしてお葬式は東京のセレモニーホールで挙げている」

「それがどうしたというんです？」

「お母様は地元でご主人のお葬式をやりたかったのよ」

「その話なら葬式の時に聞きましたよ。長年世話になった集落の人に顔向けができないって言うんでしょ」

「お母様は自分のお葬式を住み慣れた土地でとおっしゃってるわ」

「おふくろは心臓に持病を抱えてるんですよ。老人ホームに入る前に、実家で倒れたらどうするんです？ 過疎の田舎で孤独死でもされた日には、こっちの立場がありませんよ」

「とにかく、お母様の希望は伝えた。どうするかはあなた次第」

それから数カ月後、自宅そばの畑で倒れている政子を近所の住人が発見、すぐさま救急車を呼んだものの、病院に到着した時には意識がなかった。畑仕事の最中に心筋梗塞を起こしたらしい。知らせを受けた寧々が県外から病院に駆けつけ、保険証を取りに実家に帰ると、たんすの引き出しには保険証とともに「エンディングノート」と記されたノートが収められていた。

3

「自分でメシが食えなくなったら、静かに逝かせてくれ。生かされるのはごめんだ」

口癖のように話していた夫が浴室で倒れた。長湯を心配してのぞきに行くと、お湯に浸かったまま意識を失っていた。脳出血だった。救急車で搬送された病院では予断を許さない昏睡状態で、医師から「延命をしますか」と問われた。

「お父さんは延命は嫌だと言っていました」

政子が答えると、病院に到着した健一と寧々が食ってかかった。

「延命治療しないというのは、親父が死ぬってことなんだよ。おふくろ、分かってるの？」

「私はお父さんに一日でも長く生きてほしいわ」

息子も娘も実家を出てから30年以上経つ。その間、会うのは正月と盆ぐらい。延命治療を希望するのは、実家から疎遠になった子どもたちのせめてもの罪滅ぼしだったのかもしれない。

「できる限りのことをお願いします」

政子の意向を確認することなく、健一が医師に頭を下げた。その後、意識の戻らない夫は東京に連れて行かれ、療養型病院に転院した。ベッドで横たわる枯れ木のようにやせ細った体にはい

くつものチューブが差し込まれ、深いしわを刻んだ顔でうめき声を上げる夫を見て、政子は何度涙したことだろう。結局、夫は一度も目覚めることなく、1年後に息を引き取った。

「葬式は田舎でやって」

政子のそんな懇願も空しく、夫の葬儀は都内のセレモニーホールで執り行われた。式場には子どもたちの仕事先から贈られた大きな花輪がいくつも飾られ、会社関係の人間が大勢訪れていたものの、地元からの参列者はほとんどいなかった。盛大だったが、寂しい葬式だった。

「お父さん、ごめんね」政子は心のなかでつぶやき、夫を見送った。

4

市山と沙織が病院に赴いたのは政子が倒れた翌日の夜である。人気のない待合室では沈痛な面持ちでエンディングノートに目を落とす健一の姿があった。意識の戻らない政子はいま、集中治療室で手当を受けているという。

「参りましたよ」健一がぽつりと言った。

「エンディングノートに自分が死んだら連絡してほしい親戚や友人の名前と連絡先がすべて書いてあるんですよ。葬式を挙げてほしい場所も指定されていきました。実家から一番近いセレモニーホールです」

「そう……」

「そのくせ、家や土地のことは一切書いていないんですよ。エンディングノートは残しても、遺言書は忘れてるんです。おふくろ、うっかりしてやがる」

「財産はあなたと妹さんと好きにきなさい、ということよ。揉めないと分かってる相続でわざわざ法的効力のある遺言書を残す必要はないもの」

大きな息を一つして、健一が言った。

「延命治療をしてくれるな、とも書いてありました。お父さんのように管だらけの姿で死にたくない、と」

健一が途方に暮れたような表情で続けた。

「オレが親父にしたことって親不孝だったのかな」

「そんなことない。お母さんは以前、こう言ってた。子どもたちが生まれてきた時に一生分の親孝行はしてもらってる、って。お父さんも同じ気持ちだったはずよ」

政子は延命治療を施されることなく、数日後、他界した。子どもたちに看取られた政子は穏やかな表情だったという。故人の希望通り、地元のセレモニーホールで執り行われた葬儀に集まったのは、わずかな親族と数人の友人、地域の住人である。葬儀に参列した市山に、健一が苦笑して言った。

「東京で葬式をやれば、もっと盛大にやれたんですけどね」

葬儀が終わり、棺を乗せた霊柩車が火葬場に向かう途中、自宅のある集落に寄り道をした。「嫁いであら50年以上過ごした土地に別れを告げて旅立ちたい」という政子の願いがエンディングノートに記されていたのである。

霊柩車が集落をゆっくり周回すると、家々の前に立った住人たちが手を合わせ、頭を垂れている。人々が政子を見送ろうと待っていたのだ。助手席で位牌を持った健一がその姿を見て、声を上げて泣き出した。

5

「地元で葬式をして、おふくろが地域の人たちに見守られて生きてきたんだなってよく分かりました」

葬儀後、市山に電話してきた健一が寧々と相談し、実家の建物・土地の売却と墓じまいを決めたことも報告した。

「実家を空き家のまま放置しておくわけにもいきませんから」

「それで遺品整理はどうするの？」

「仕事が立て込んでいて長期間休めないの、業者に頼むつもりです」

「大切な親の人生の後片付けよ。最後の親孝行だと思って、遺品整理は自分でしなさい。遺品もエンディングノートなんだから」

数日後、市山と沙織が様子を見に政子の家に赴くと、健一と寧々が遺品整理のため訪れていた。

兄妹が作業を始めてほどなく、家の至るところから懐かしい品々が出てきた。着物を入れたたんすの引き出しに収められていたのは、へその緒が入った2つの桐の箱。箱にはそれぞれ健一と寧々の名前と誕生日が記されている。押し入れからは2人の通知表や小学生時代に書いた作文、クレヨンや色鉛筆で描かれた両親の絵、夏休みの工作などが出てきた。茶の間のテレビ台の下には幾冊かのアルバムがあり、なかを開くといまの健一や寧々よりもずっと若い両親が幼い子どもたちとともに笑っている。「家族の黄金時代」がそこにあった。目を真っ赤にしてアルバムのページをめくる寧々がぽつんと言った。

「この写真を見るだけで私たちが大切に育てられたこと、分かるよね」

「両親がしてくれたように、オレたちも子どもを愛してやらなきゃな」

兄妹がしんみり話し合っていたころ、市山と沙織は集落ののどかな道を歩いていた。

「依頼人の母親にエンディングノートを書くように勧めたのは、おっさんなんだろう」

「まあね。エンディングノートと遺言の違いを理解してもらうために3日通ったけど」

「おっさんが死んだら純白のウエディングドレス着せてやるよ。楽しみにしてろ」

ぶっきらぼうに言う沙織を市山が意外そうに振り返る。沙織が照れ臭そうに付け加えた。

「おっさん、その年で生足はチャレンジャー過ぎるぞ」

この日の市山はキャミソールに黒のカットソーを重ね、下はデニムの短パン姿だ。春を迎えて、太股をむき出しにしている。

「あら、生足に年齢制限なんてないわ。女はいくつになってもファッションで冒険することをあきらめちゃいけない。なぜなら女にとって、美しくないのは犯罪だから」

「だったら、おっさんは完璧に罪人だ。即刻自首しな！」